

# 「さいきん紙」のこれまで

前「さいきん紙」編集者 田原 久八郎

## 1. 「さいきん紙」発行のきっかけ

今から12年ほど前の平成18年1月、当時の国際交流員トム(・グロエンダル)さんと和楽の喫茶店(当時はありません)で一緒になり、そこでの意見交換の中から出たことでした。よいイベントをやっているのに観客と参加者がとても少ない。せっかくのイベントが本当にもったいない。事前にイベントについてみんなに知らせるいい方法はないものかと、考えたのが始まりでした。

チラシの裏紙にこんな感じでどうだろうと殴り書きし、イベントを知らせる予告の情報紙、「市民活動がんばるニュース(仮名)」を作るといいということになりました。

当時のまちづくり関係の知人、NさんとUさんに加わってもらって、場所を変えて話し合うこと数回。内容、目的、方法などについて検討し、情報紙の名前も、最終的に「さいきん紙」にしようということになりました。

## 2. 情報収集をどうするか

各活動団体から予定のイベントを前もって申告してもらおう。その為には、活動グループの団体名の洗い出しが必要でした。申告してもらえないまではこちらから各団体に問い合わせる。できるだけ申告してもらえようお願いします。活動紹介、活動報告、意見発表など同時に掲載していこうという計画でした。

## 3. 先ず3月号を試作

Nさんがイラストレーターで、モデルの仮枠を作ってくれ、それを元に、中身を埋めて試作の3月号が出来ました。

2006年(平成18年)4月1日、イベントニュース「さいきん紙」第1号4月号が、29件のイベントを載せて、スタート。当初はイベントの説明・歴史、グループの紹介も掲載できました。

印刷もパソコン打ち出しで、50部程度で少ない部数。発行元は「佐伯イベントニュース」で費用は個人持ち。ゴルフや旅行と同じ、趣味感覚でした。

## 4. 補助金を得て、表裏印刷の2000部発行に

NPO代表のYさんの紹介で「がんばれ大分社会貢献ファンド」に応募でき、採択され2009年(平成21年)4月から1年間だけでしたが彩木の会がその補助金を得ることができました。これを機に裏面にも記事を入れ、部数も200部から増えて、年度末には2000部の発行にまでなりました。

その翌年度からは、佐伯市市民協働推進事業に応募、採択され、昨年度までその事業の補助金を得て、またサポーター企業さんと彩木の会の協賛金の応援も加えて、同部数の発行を継続この3月の4月号まで発行を続けることができました。

## 5. 多くの方の協力で紙媒体の発行が出来ました

- 1) 起ち上げの4人
- 2) 校正、印刷、紙折り、配布の手伝いをして頂いた方々
- 3) 応援協力、励ましをいただいたスポンサー企業、お店、その他の方々
- 4) 市役所の係の方々、商工会議所の担当者の方(助言訂正等)
- 5) 彩木の会の会員の方々(大きな支えでした)

## 6. 天からの贈り物でした、「後継者」

後継者探しは、何年も前からの懸念でした。特にこの2年ほどは、体力的な限界を感じてきておりましたので、かなり状況は深刻でしたが、それを感じてもらえていたのでしょうか、降って湧いたようなウソのような話が舞い込んできました。

最初に聞いたときには、本当とは思えませんでした。「さいきん紙」を専門に引き継いでもらえるというのです。情報発信室の要因として採用されるとのことでした。曾根田敏治さんの人選であるとのこと。宮明邦夫(株)まちづくり佐伯)の社長さんの承認を得ているようでした。

山口英志(ひでし)さんがその人。32歳、若い。苦勞されてきているというお話を聞いて、とても嬉しくなりました。やったーと喜びました。

私、今度75歳になりました。精神的には35歳くらいのつもりですが、寄る年波という言葉がありますが、これには適いません。引継ぎのあいさつに和楽や三余館と一緒に回ってもらった直後にガタがきてしまいました。ダウンしたのです。意識的には予期せぬ出来事でした。考えればなんとラッキーな事であったかと思える、何ともこれまた、不思議な出来事、出会いでした。

## 7. 神はいる(紙は要る)

お年寄りの方には特に、紙媒体がよい、紙の「さいきん紙」が要る。ネット情報では困るということは何人もの人に言われました。「(株)まちづくり佐伯」さんが、毎月の「さいきん紙」の設置場所、これまでと同様に、ご要望に応えますとのこと。設置場所は、月初めに、よろなか、市役所、各振興局、公民館、道の駅、和楽、観光交流館、城下堂、など。ネット配信は、市HP→佐伯市観光大百科(赤バナー)→「イベント情報はこちら」です。

## 8. お礼とお願い

間違いを詫びて感じる 暖かさ  
ご厚誼(こうぎ)感謝 これまでは皆

これからは、山口さんちの、ひでちゃんに変わらぬご厚誼、どうか宜しくお願い致します。